第63次合同教育研究全道集会（室蘭）教育実践セミナーでの講演要旨・・・・・・・・・・・・・・

「知里幸恵を今に」

知里幸恵銀のしずく記念館館長

横山むつみ さん

中学校社会科歴史（帝国書院）や中学校「国語」（教育出版）の教科書にも登場する知里幸恵（1903年～1922年）。アイヌ民族の歴史上の人物では、シャクシャインと並ぶ有名な人物である。彼女はわずか19歳で亡くなり、生前、校正を終えていた『アイヌ神謡集』は死の翌年に刊行された。この本が、アイヌで初めてアイヌの物語（口承文芸）を文字表記（ローマ字）し、さらに日本語訳がなされたことで、アイヌ史の重要な基点になった。

そこで、知里幸恵の姪にあたる横山むつみさんに、幸恵の一生を四つの時期に分けて語ってもらった。

① **登別で生まれ育った時期** … 祖母・モナシノウクからアイヌ語の基礎を学ぶ。
② **旭川で小学校、女子職業学校に通っていた時期** … おばの金成マツ（ユカラの伝承者）や祖母と13年間暮らす。アイヌの子だけが通う「土人」学校、小学校の高等科でのいじめ、全校で一人だけのアイヌだった女子職業学校。
③ **東京での生活** … 15歳のとき、金田一京助（アイヌ語の研究者）に出会い、アイヌ文学のすばらしさに気づく。幸恵の知っている口承文学（カムイ・ユカラ）を本に出すということで、金田一京助のところに行く。重い心臓病を病んでいて四カ月で急死した。
④ **没後** … 亡くなった翌年、『アイヌ神謡集』が出版された。

この後、横山さんにお話しいただいたことをまとめてみる。

（A）首都圏のアイヌ民族の活動について

横山さんは1970年代から東京に住み、北海道に戻ってきたのは1997年。当時、首都圏ではアイヌ民族出身者がまとまろうという機運があり、ペウレ・ウタリの会や東京ウタリの会などが組織化されていった。その後、80年代には関東ウタリ会が組織され、首都圏のアイヌの要望が強かった奨学資金や住宅資金などの施策を北海道並みにという運動になり、国会への陳情活動などを行っていた。1986年の中曽根首相による「日本は単一民族国家」発言、北海道ウタリ協会（現・北海道アイヌ協会）による「アイヌ新法」制定活動などがあり、世の中が徐々に変化の兆しを見せてくる。この間、首都圏にはレラの会や東京アイヌ協会

などが組織されていった。1997年、アイヌ文化振興法が制定された。同法によって直ぐに差別や偏見がなくなりはしないが、和人がアイヌ民族の存在に気がつき、アイヌ文化に関心を持つというきっかけになっている。

（B）中学校「国語」教材『銀のしずく降る降る』について

教科書に載ることはいいことだが、なぜアイヌ語が伝えられなかったか、尊重されなかったか、そして、日本政府による同化政策が書かれていない。

（C）今、政府がすすめている白老のアイヌの象徴空間、国立のアイヌ博物館について

博物館を建てることで、国の政策を終わらせようとしているのではないか。土地の権利、資源の権利などの先住民族の権利を、これを建てることで全部忘れさせようとしているのではないかと懸念する。

＊・＊・＊美術教育での広がり＊・＊・＊

～全国で実践の可能性～

現在使用されている中学校「美術」教科書では、アイヌ民族の文化・芸術が大きく掲載されています。美術教育でも、「伝統文化」を扱う傾向があり、仏像や家紋、茶点前用菓子などの武家・貴族・皇室由来の文化について盛んに学習をすすめる状況があります。しかし、本来の伝統文化というのは、手仕事として庶民の生活を支え生命を育んできたものとおさえています（教研より）。アイヌが先住した北海道では、アイヌ民族の文様文化や工芸は、地域に根ざした伝統文化として「先人の知恵や技術に学ぶもの」であり、風化させず未来の私たちの生活に脈々と受け継がれるべきものです。

北海道に生きる私たちは、民族の関係や人権の問題にふれた上で「いかに生きるか」を考えながら、アイヌ民族の文化を日常の中に息づかせていく教育実践をしていくことが大切です。

↑日本文教出版2・3下

↑光村図書2・3下

↑光村図書1